



# 平福 百穂 ひらふく ひやくすい

生まれた場所：仙北市（旧角館町）

生まれた年：1877年

なくなった年：1933年

※平福穂庵・寺崎広業・平福百穂の画集は、先覚記念室で見ることができます。ぜひ学習シートと共に見て下さい。

## 日本画に西洋画の考えやわざを取り入れた画家

平福百穂は、今から130年以上前の1877年、仙北市（旧角館町）に生まれました。本名は貞蔵といます。お父さんは平福穂庵です。穂庵は、新しい風を日本画の世界にふきこんだ画家としてゆうめいです。

百穂が13歳のとき、父の穂庵は、百穂に何枚かの絵の手本をあたえました。そして筆の持ち方、すわり方、墨のすり方まで細かく教えました。穂庵は、百穂に自分のあとをついでほしかったのでしょう。しかしすぐに穂庵は亡くなってしまい、百穂は十分に教えてもらうことはできませんでした。ただ、このときから、百穂は絵の道に進もうと決心したようです。

17歳のとき、百穂は東京へ出て、川端玉章の弟子となります。ここで百穂は、むかしの日本画を模写（まねて写すようにかくこと）して、そのわざを身につけました。

また20歳のときには、東京美術学校（今の東京芸術大学）の日本画科でも絵を学びました。21歳のときにかいた「韓退之」という作品は、ある会で2等となり、百穂の名前が知られるきっかけとなりました。

百穂は、結城素明らとともに、无声会というグループを作り、毎年のように展覧会をひらきました。その当時の日本画は、中国や日本の歴史の場面を絵でえがくことが多かったのですが、百穂はそれとはちがい、身近な景色や身近な人々の生活をえがくようになりました。また25歳のときには、東京美術学校（今の東京芸術大学）の西洋画科に入り、外国の絵のかき方も学びました。このことは、のちに百穂が、日本画用の筆だけでなく、外国から伝わった絵の具用の筆を使って、日本画をかくことにつながりました。

また百穂は、いろいろな新聞やざっしのさし絵もかき、これは30歳のころから20年以上続けました。

百穂が37歳のとき、第8回文展に出した「七面鳥」という絵が3等を受けます。

作家である夏目漱石は「文展の日本画で見るに足りるのは百穂の七面鳥ぐらいだ」とほめたたえました。こうして百穂の名前と絵は、広く知られるようになりました。

それから、百穂は、次々とたくさんの日本画を発表します。その作品のはばは広がり、百穂は前にはえがけなかった歴史の場面の絵も、かくようになりました。むかしながらの日本画のかき方に、西洋の絵のよさを取り入れた百穂の絵は、高くひょうかされました。また53歳のときには、長年続けてきた秋田蘭画の研究を本にまとめました。

55歳のとき、百穂は、東京美術学校の教授になります。しかし、そのときには百穂の体には、病気がしのびこんでいました。そして56歳のとき、お兄さんのそう式のために来た秋田の地で、倒れてしまいます。そのまま百穂は亡くなってしまいました。百穂は、お父さんが作った新しい日本画への道を歩み続け、日本画の世界に西洋画の考えやわざを取り入れました。今ごろ、親子は天国でどんな話をしているのでしょうか。